

## 映画『遙かなるふるさと 旅順・大連』に触れて

大類 善啓

2009年2月、羽田さんにインタビューした(09年5月発行の本誌8号掲載)。その折り羽田さんの「本当は、旅順が撮れるようになったら、撮りたいんですよね。どういうふうに撮るかはまだ考えていませんがね」という言葉でインタビューを終えた。当時はまだ旅順が全面開放される前だった。ところが、その8号の編集を終える段階の4月、旅順口区の区長が、その年の秋には旅順を全面開放すると語った、という記事が目に入った。すぐに羽田さんに電話を入れた。

羽田さんは心筋梗塞をした後でもあり、また腰を痛められた様子で、正直言って映画製作は無理かなと思った。しかしインタビュー記事の最後に、私は旅順全面開放のニュースに触れ、「これはすぐにでも旅順を舞台に、『わが懐かしの旅順、そして今』といったテーマで新たな作品に着手していただきたいと思った」と原稿を締め括った。

今度の映画のタイトルは、『遙かなるふるさと 旅順・大連』である。映画でも語られていたかもしれないが、「懐かしの旅順・大連」ではなく「遙かなる旅順・大連」である。

羽田さんにとって「懐かしい故郷」であるけれど、<懐かしい>という言葉が素直に口に出せないところに、他人の土地に入り込んだ人々の思い、羽田さんの思いがある。

映画で描写されているが、経済的に繁栄する旅順や大連には、もはや昔日の面影はない。かつての故郷は、懐かしい対象ではなく、<遙かなる>地になってしまった。

旅順で羽田さんが幼少の時、魚釣りをする父親に連れられ、海に出かけた。昼にお弁当を食べている時、中国の子どもたちが羽田さんたちの回りを囲んで、ずっと食べるのを見ていたという。そのことが衝撃的だったという羽田さんのナレーションは、とても短いものだった。そこに羽田さんの重い心のありようが隠されているように思った。

家庭では、およそ口を聞かないお父さんだと聞いていた私は、お父さんもお子さんを連れて遊びに出かけられることもあったのだと思うとともに、私にとって最も強い響きをもったナレーションだったため、改めてその時の様子を聞きたくなり、電話でお伺いした。

その日は、妹さんも一緒だった。「おにぎりだったと思う」と羽田さんは言われたが、めったに子供とも話をしない父親と出かける子供たちのために、やさしいお母さんは、子供たちの好きなおかずをたっぷりと持たせたに違いない。これは私の想像だ。

ところが食事を始めたら、中国の子供たち5、6人が羽田さんを囲みだした。羽田さんたち3人は、いたたまれないように、弁当を置いてその場を立ち去った。すると、中国の子供たちは、弁当の食べ残したものをどこかに持って行ったという。

この映画は、私小説ならぬ、羽田さんの私映画とっていいだろう。しかし、植民地の街から本来の主人公の土地に返った旅順と大連の歴史の重みが自ずと見えてくるのだった。